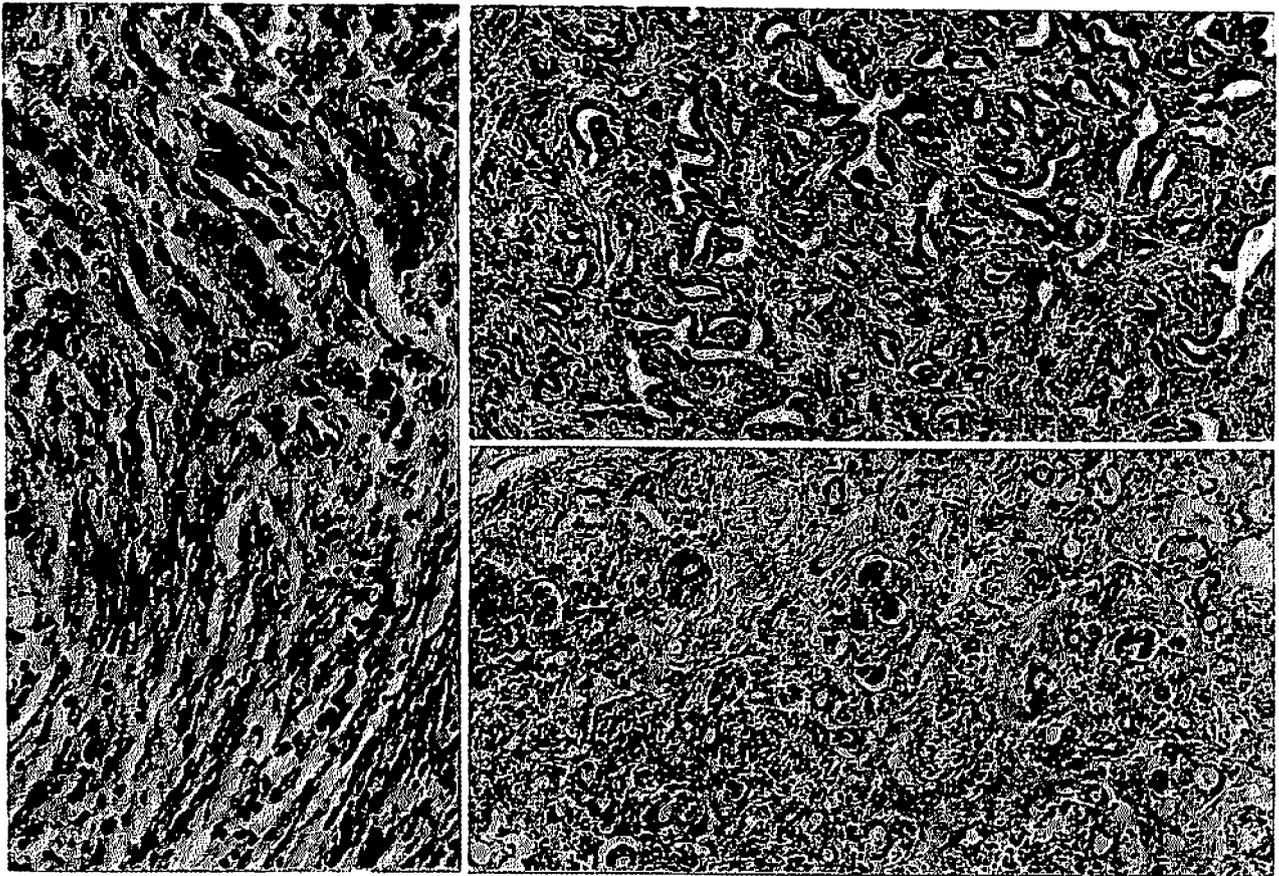


鶏白血病ウイルス接種鶏にみられた肝と腎の病変

家畜衛生試験場病原病理研究室出題 第18回獣医病理学研修会標本No.292



鶏白血病ウイルス（A亜群）の継代中にみられた病変である。野外から分離純化したウイルスを初代接種材料とし供試鶏にはRIFフリー%の1日齢ヒナを用いた。継代接種には赤芽球性白血病を発症したヒナの肝細胞浮游液を用いた。本例は3代目の1例で、 10^7 個/mlの肝細胞浮游液0.2mlが腹腔内に接種され、150日齢頃から削瘦、元氣消失、衰弱を来とし、触診で肝の腫大が認められた。176日齢時に剖検に付した。

肉眼的所見：肝は腫大し粟粒大ないし大豆大の限界不明瞭な淡黄白色病巣が存在した。脾も高度に腫大し肝と同様の病巣が散在した。腎の一部は灰白色髓様を呈し、精巣は左右とも約半分の領域が暗赤色を呈した。下腿骨は腫脹し骨質は硬固な石灰様で骨化石症を示し髓腔は狭かった。骨髓は概ね赤色で微小白斑が散在した。F囊をはじめ他の諸臓器に異常はみられなかった。

組織学的所見：肝においては、肉眼的に黄白色病巣として認められた領域は主に線維細胞からなる腫瘍性増殖巣（写真左）で、小葉間結合織から実質を侵して広がっていた。線維細胞は束状をなして不規則な走行を示し、一部には淡明類円形核の上皮様細胞が介在していた。病巣に接する門脈枝の内膜位には好銀線維を伴った細胞増

生があり管腔を狭窄していた。かゝる病巣とは別に小葉間結合織を中心に腺管構造を示す上皮細胞とその間隙を埋める結合織から成る病巣（写真右上）が散在し、腺管にはときに小規模な乳頭状突起の形成がみられた。さらに拡張した類洞内には多数の赤芽球様細胞が増数蓄積していた。

腎の病変部の組織構成は、ロゼット状配列ないし管腔状配列あるいは糸球体様構造を示す上皮細胞群と、その間隙を埋める結合織細胞から成っていた。腺管のなかには内腔が拡張し小嚢胞状を呈するものもあった。毛細血管腔には赤芽球様細胞の流出がみられた（写真右下）。

提出標本以外に、赤芽球の腫瘍性増殖が骨髓と脾に、線維肉腫病変が脾にみられ、また精巣には洞性血管腫が存在した。本例は実験例であり、鶏白血病ウイルスによって引き起こされる多様な病変群のうちの幾つかが一症例中に共存している症例と解される。肝における腺管構造と結合織から成る組織の形成は、腺組織の脱分化的性格が示唆され、鶏白血病ウイルスによる病変群の一環であろうと思われた。

組織学的診断：肝、腎の赤芽球症。肝の腺管構造を随伴した線維肉腫。腎芽腫。